



繊細な螺鈿や蒔絵の技術が濃縮された浅井さんの作品。
小さい物でも半年、大きな箱物だと完成まで5年を要するもの。

浅井 康宏

あさいやすひろ 漆芸作家。
1983年鳥取県生まれ。国立
富山大学高岡短期大学部漆
工芸コース卒業後、室瀬和美
(重要無形文化財保持者)に
師事。独立後、作家活動を開
始。2012年に日本伝統工芸
展「新人賞」、'15年に日本伝
統漆芸展「文化庁長官賞」な
ど、さまざまな賞を受賞。

「いい作品を作るのは当たり前で、それを多くの人に伝えるのが表現者の仕事。でも僕の作品云々より、ボスである漆に『ちゃんと漆芸の魅力を伝えろよ』と言われてる感じなんですよね。蒔絵は1200年間一度も途切れたことがなく、世界が大きく変化していても続いていく素晴らしい文化。大きな夢のある世界なんだよと、世界中の人に発信していきたい。それが僕の使命なんです」

漆芸は夢のある世界だと伝えるのが僕の使命

うイメージが強いのですが、過去の偉大な作品を辿ってみると実は時代の最先端の連続なんですよ。ね。伝統こそ繋いでいくものであり、現代の最先端の感性を加えていけば将来的に伝統になっていくものなんです。そういう意味では、

この世界では僕はまだまだ若手で、今はそれも強みだと思います。新しい表現に挑戦することも意識的にできるし、何しろ一つの作品に何年もかかることがあるので、体力と目と根気が勝負ですから」

2020年春からはYouTubeの生配信で、漆の魅力を発信するという新たな試みにも挑戦している。

「いい作品を作るのは当たり前

で、それを多くの人に伝えるのが表現者の仕事。でも僕の作品云々

より、ボスである漆に『ちゃんと漆芸の魅力を伝えろよ』と言われ

ている感じなんですよね。蒔絵は

1200年間一度も途切れたことがなく、世界が大きく変化して

いても続いていく素晴らしい文化。大きな夢のある世界なんだよ

と、世界中の人に発信していき

たい。それが僕の使命なんです」

それを何色と表現したらいいのかと目を凝らしているうちに、意識が遥か彼方へ飛んでいくような錯覚に。そんな不思議な感覚に陥る作品を発表する浅井康宏さん。高校時代に漆と出会い、そこから一途に漆芸家の道へ入る。「長いこと不登校だったので、このままだと人生マズいなあと思いながら、工芸科のある高校に入学。授業で出会った漆黒の艶に、希望の光を見てしまったんです。ああ、これで生きていけるなって」

短大卒業後は蒔絵の人間国宝、室瀬和美氏のもとで修業。同時に、実家の梨園を漆に植え替え自ら漆を育てるという大胆な行動に出る。「祖父母も梨の木も高齢化して次はどうする?というタイミングで、ならば漆だと親をそのかして。植樹して13年目に漆の樹液を採取できるようになり、今は実家で採れた漆を使っています」木を育てる経験は、漆との関係をも変える大きな出来事になった。「漆って弱くて頼りない木なん



1.「図案は紙の上なので、立体になると別物に。しかも漆は色ではなくて輝きなので、実際に作りながら微調整を繰り返します」 2.漆芸には筆、刷毛、研ぎ炭、刃物などさまざまな道具を使う。 3.毎日描き溜めてきた図案日誌。一日一案、造形と意匠を考え、「よさそうだというものでスタートさせる」という。十数冊の日誌は浅井さんの財産だ。

です。人がいないと増えないから、樹液を僕たちに提供することで自らが生きられるという生存戦略として人を使っているんです。だから育てていると漆がどんどん愛おしくなって。今の僕は、漆に人生を捧げます、僕を使ってください」という感情が動機なんです」

愚直なまでに漆に忠誠を尽くす

浅井さん。今では、伝統的な漆工芸界に現代のセンスを加えた独自の世界観を確立している。

「伝統というと、守るものとい



1200年にわたる蒔絵の文化を未来に繋ぐ使者として。

新進気鋭の漆芸作家として注目を集める浅井康宏さん。
YouTubeやTwitterなどSNSを駆使して漆芸について積極的に発信し、日本はもちろん、ニューヨークや香港など海外でも注目を集めている。

photo:Ryo Kusumoto text:Naoko Arai